

## 19 世紀後半の東アジア世界の様相

— 朝鮮半島情勢を中心に —

Aspects of the East Asia world in the late 19th century

— Focusing on Korean Peninsula situation —

地理歴史科 山川志保

<要旨>

2022 年に実施予定の次期学習指導要領では、地理歴史科で「歴史総合（仮称）」が新設され、歴史的思考力の涵養とアクティブラーニングの導入等も提起されている。これをふまえて、「単元を貫く基軸となる問い」として「東アジアにとっての近代化とは何か」を設定し、19 世紀後半の朝鮮半島情勢を主軸に文字資料の活用を含む授業を組み立てた。李鴻章や金玉均らが生きた 19 世紀後半の東アジア世界の様相を文字資料から生徒はどうとらえたのか、その授業実践の状況を報告したい。

<キーワード> 歴史的思考力 文字資料 資料活用 李鴻章 開化派 壬午軍乱 甲申政変 金玉均 日清戦争 中華帝国の崩壊

### 【はじめに】

2022 年に実施予定の次期学習指導要領において、地理歴史科では、「歴史総合（仮称）」が新設され、必修科目となる方向性が示されている。<sup>1</sup>「歴史総合（仮称）」は、現行学習指導要領の日本史 A・世界史 A を統合し、グローバルな視野で近現代史以降を学習するという設定のもと検討が進んでおり、歴史的思考力の涵養と教授法としてのアクティブラーニングの導入等も提起されている。また、文部科学省による「歴史科目の検討のあり方について（素案）」<sup>2</sup>の中で、新科目のイメージとして「歴史の中に「問い」を見出し、資料に基づいて考察し、互いの考えを交流するなど、歴史の学び方を身につける」とのことが提起されている。この「歴史総合（仮称）」を意識しつつ、現行の学習指導要領（2015 年完全実施）にある、「諸資料に基づき歴史的思考力を培う」、特に文字資料を活用した授業実践（2 年次必修科目世界史 A）<sup>3</sup>を報告したい。

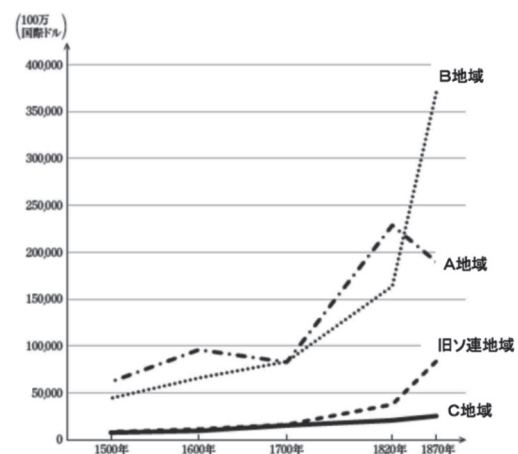
### 【歴史的思考力とは】

そもそも「歴史的思考力」とは何であるのか、明確な定義がなされている訳ではない中で、様々な見解が示されている。<sup>4</sup>その共通項と、文部科学省が「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」で評価すべき能力とマークシート式の問題イメージ例【たたき台】<sup>5</sup>の中で示した「世界史の中で重視すべき学習のプロセスと評価すべき具体的な能力（案）」<sup>5</sup>などを参考に考えると、①資料から情報を取り出す力・分析する力・歴史上の事象との関わりを推論する力②歴史上の出来事・因果関係を分析する力・③多角的・多面的に歴史的な出来事をとらえ、考察する

力・④根拠に基づいて、論ずる力などを主軸に捉えることができると考えられる。

### 【本校生徒と歴史的思考力】

試しに本校の生徒に、「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」で示された世界史の「歴史資料をよみとき、複数の歴史事象を関連付けながら、多面的・多角的に考察して仮説を設定し、論拠に基づいてその適否を判断する問題」<sup>6</sup>を、学習状況に応じて一部改変し、提示してみることにした。



左のグラフは、日本・中国・西洋・旧ソヴィエト連邦（旧ソ連／ロシア地域中心）にあたる各地域の経済規模（GDP）の長期的な傾向を把握するために、16 世紀まで遡って推計したものである。グラフ及び注を読んだ上で、西欧にあたる地域を A～C より選び、その根拠を下に書きなさい。

注1 「西欧」「旧ソ連」というまとめ方はマディソンの著書によ

ている。

注2 GDP 数値は、主として一人あたり産出額に人口規模を掛け合わせて算出した概算値を用いている。また、国際ドルとは、異なる通貨単位を計量するために使われる単位である。

(出典：グラフはアンガス＝マディソン著『統計で見る世界経済2000年史』の数値より作成/文部科学省)。

2年次の最初の授業でこの問題を提示し、教科書や資料集を使用する形で問題に取り組んでもらった。その根拠としては、「イギリス産業革命」を挙げるものが多かった(回答例①)が、中には西欧をAと回答したり、西欧自体はBであることを導き出せてはいるものの、中国をCであると回答しているものもあり(回答例②)、2年次4月の段階では、未学習の中国の歴史的経済状況を判断する根拠を持ち合わせていないことが伺えた。

《生徒の回答例》

①自分の持つ知識から根拠を導き出しているケース

18世紀後半にイギリスで産業革命がおき、19世紀初頭にはヨーロッパ諸国にも波及していったので、その時期にGDPが爆発的に伸びているから。

C…日本→鎖国の影響

A…中国→18世紀後半に落ちている→アヘン戦争等？

②西欧の回答はあっているものの、消去法で答えており、中国の歴史的経済状況のイメージが薄いケース

GDPの変動幅が大きいため、(開国後の日本)Aが日本だと考え、1500～1870年の間あまり成長していないため、Cが中国だと考えたから。

③産業革命という根拠を示して西欧を導き出そうとしているが、産業革命の時期が曖昧であり、また中国の歴史的経済状況のイメージが薄いケース

中国は当時は今ほど発展していなかったと思われるのでCであり、産業革命などの影響で1700年ころに上昇し、それに遅れ日本が発展したので西欧がA、日本がBであると思う。

同様の課題を既に2年次に世界史Aを履修し、3年生で世界史Bを選択している生徒(但し中国史の4世紀～18世紀は未学習)に実力試験の一部問題として「中国のグラフ」を選ぶ形で出題したところ、正答率は約42%であり、誤答だった生徒の多くがCを選択していることが分かった。こうした誤答や生徒の認識を踏まえて、今後の授業の内容改善をはかり、生徒が思考する際の根拠となる知識を培っていくことが大切であると考えている。

【単元を貫く「基軸となる問い」と歴史的思考力】

2年次の世界史Aでは、1学期前半に扱うイギリス産業革命の授業をした直後に、生徒に対して以下の課題を課している。

この課題は、イギリス産業革命期の国内総生産成長率<sup>7</sup>が、例えば日本の高度経済成長期の国内総生産成長率と比較しても低いことが読み取れる資料を生徒に提示して、「革命」について再度捉え直しをさせることで、1学期前半の授業で扱うイギリス産業革命・アメリカ独立革命・フランス革命などを貫く「基軸となる問い」である、「革命とは何か」を思考させ、革命への理解を進めることを目的としている。

以下の資料を参照にして、イギリス産業革命は「革命」といえるのか、根拠を示して論じなさい。

資料1 英国の国内総生産成長率と人口増加率、1700～1831年(年率、%)

期間	国内総生産 (GDP) 成長率諸推計			人口増加率
	クラフツ＝ハーリー (1992年)	クラフツ (1985年)	ディーン＝コール (1862年)	
1700～1760	0.69	0.69	0.66	0.38
1760～1780	0.64	0.70	0.65	0.69
1780～1801	1.38	1.32	2.06	0.97
1801～1831	1.90	1.97	3.06	1.45

(出典：岩波講座「世界歴史22」斎藤修著「産業革命—工業化の開始とその波及」より。)

「イギリス産業革命は革命といえるのか？」という問いに対して、殆どの生徒は「革命といえる」と回答している。その回答としては、「革命＝急激な変化」と定義付けた上で、その期間を相対的に評価しているもの(回答例①)や、革命そのものの性格に踏み込んで論じているもの(回答例②)、現代社会の起点として捉える視点を提起しているもの(回答例③)など様々あり、中には自身で独自の資料を探し出してきて比較するものや、「revolution」という単語そのものの日本語訳のあり方に言及するものもあった。「革命」について多義的・多面的・多角的にとらえる視点を持ち合わせているかなども含めて、以下のようなルーブリック<sup>8</sup>により回答を評価することを試みているが、一方で生徒の回答から「革命」に関する授業の改善の必要性も感じるものとなった。

ルーブリック	2	1	0
思考・判断・表現	「革命」を定義づけ、根拠に基づいて、多義的かつ多角的な観点から、自らの考えを示している。	「革命」を定義づけ、根拠に基づいて、1つの観点から、自らの考えを示している。	「革命」を定義づけられていない。根拠に基づいて、自らの考えを示していない。
資料活用	提示された資料だけでなく、自ら調べた資料を踏まえて分析がなされている。	提示された資料を踏まえて、分析がなされている。	提示された資料を活用できていない。
知識・理解	授業で得た知識や、調べたことにより得た知識を踏まえて、論じている。	授業で得た知識や、調べたことをそのまま書いている。	授業で得た知識や、調べたことを生かしていない。

## ①「急激な」の相対的把握・世界的変化への言及

私は「イギリス産業革命」は革命と言えると思う。理由はいくつもあり、まず「革命」の長さだが、イギリス産業革命は約100年かかったとされる。「革命」は急激な変化を言うから、この100年という期間を長いととるか短いととるかが論点となるが、私は急激と言ってよいと考える。…「イギリス産業革命」はイギリスで生じた世界的変化であり、分母としては、人類の手工業の歴史が考えられ、これは割合をみるととても小さくなり、急激な変化と言ってよいと考えられる。又、他の理由として経済成長率の低さも論点となるが、当時は世界各国の市場を結ぶ交通の便も未発達で、生産力と授業のバランスがかみあってなかったために、経済成長がなかったのだと考えられる。

## ②革命の性格への言及

「イギリス産業革命」は、私たちが一般にイメージする画期的で大きな変化という意味では革命と言えるだろう。確かに多くの技術が工業化し、人々の生活も否応なく機械とともにあるようになったからだ。しかし「革命」本来の意味に戻って考えると、これはやはり急激な変化ではないため、革命とは言えないのではないだろうか。さらに衛生的にも道徳的にも人々の生活は悪化したため、そもそも発展という言葉を使うのも適さないと思う。ここでフランス「革命」でいう「革命」の視点からも考えてみる。これは被支配階級が支配階級から権力を奪うのが主な意味だが、広く捉えると、人々が自分たちの意思で革命を起こすとも言えるだろう。ではイギリスの産業革命は人々が多少なりとも変化を肯定したのだろうか。…それは困惑し否定する人も現れていた。つまり人々の意志に比例したものではなかったのだ。以上を考慮し、私は「革命」とは言えないと思う。

## ③現代社会の起点として捉える視点

私は産業革命は革命といえると思う。もちろんGDP増加率は2%前後となっており、この数字はさして革命といえる程度のものではない。だが産業革命といわれている期間では、工業や社会・経済のあり方が大きくかわった。…このように経済の体系を大きくかえたことは革命と呼ぶのに値する。また、産業革命によって資本主義体制が確立され、その負の側面が見えてきて、社会主義や共産主義といった考え方が生まれた。加えて現代社会で国々は産業革命に乗り遅れたか否かで、経済的に先進国が従属国となるのか決まってしまう。現代社会を形づくっているといえる。今日の世界は、産業革命なしではなかったといっても過言ではない。このように現代社会を作り出した産業革命は、物事が急激に発展・変革した「革命」といえる。

## 【19世紀後半の東アジア世界の様相】

前述のような1学期の授業<sup>9</sup>を踏まえた上で、2学期後半に設定した今回の授業実践で扱うのは、現行学習指導要領<sup>10</sup>の世界史A「(2)一体化する世界エアジア諸国の変貌と近代の日本」に該当する範囲であり、「ヨーロッパの進出期におけるアジア諸国の状況、植民地化や従属化の過程での抵抗と挫折、伝統文化の変容、その中で日本の動向を扱い、19世紀の世界の一体化と日本の近代化を理解させる。」とされている箇所である。この単元を貫く『基軸となる問い』として、「アジアにとっての近代化とは」という問いを設定することにし、歴史資料の活用を通じてこの『基軸となる問い』に迫る授業を構成することとした。

今回、授業を設定することにした19世紀後半の朝鮮半島情勢は、清・日本・ロシアの勢力がせめぎ合い、それぞれの思惑が錯綜した地域である。中学社会・日本史Aで扱われた事項と重なる部分も多く、生徒にある程度の基礎知識があることから、文字資料を中心に授業を展開しやすい範囲であると考えた。この授業で活用する文字資料は、李鴻章や金玉均といった東アジアの知識人の当時の思いが伝わるもの(会話文・回顧録・日記など)とした。但し、当然のことながら原文で読むことは不可能であるため、日本語訳の文字資料を書籍や論文から収集し、利用することとした。こうした文字資料の1つ1つを通じて、複雑な情勢下に置かれた東アジアの知識人が、「自らに何を問わざるを得なかったか」を考察するというまとめを最後に設定することとした。(尚、指導案に関しては末尾に添付されているので参考にされたい。また授業及び本論文の参考文献も添付されている。)

## 1. 導入

19世紀後半の清が、朝貢国あるいは藩属国を次々と失っていく状況にあることを確認した上で、生徒に提示するのは、1883年8月に交わされた李鴻章と駐清アメリカ公使ヤングとの会話である《史料①》<sup>11</sup>。この会話文を、生徒(李鴻章役とヤング役を指名)に読んでもらった上で、《史料②》《史料③》を含めた以下の3つの課題に4～5名のグループで取り組んでもらうこととした。

**課題1** [史料①]中の(a)・(b)・(c)の出来事を具体的にあげてみよう。(b)は2か所あるが、同じ出来事にあたる。

**課題2** 李鴻章および清にとって朝鮮とはどのような存在だということができるだろうか。[史料①][史料②]からキーワードを書き出してみよう。

**課題3** [史料①]・[史料③]からみてとれる、李鴻章の思う日本像はどのようなものだろうか。キーワードを書き出してみよう。※キーワードは、2文字から6文字程度で書き出すようにしてください。

[史料①] 李鴻章と駐清米公使ヤングの会話 1883年8月8日

李「…しかし知つてのように、日本はわが敵国である。我々が受けられないような優遇を日本が受けるなど堪えられぬ。朝鮮に関しては、何の憂慮もしていない。日本の影響力など恐るるに足らない…私こそ、朝鮮の王である。私が清朝の利害でそうした大権を主張せねばならぬと思つたときには必ず、である。日本などおそ懼れてはいない。(a)昨年の夏、日本が軍隊を朝鮮に派遣したとき、日本とはいつでも戦争できたし、いまでもそうだ。わたしは朝鮮国王の内政には介入したくないし、その自主を脅かしたくもない。それは清朝の政策に違ふ。けれども日本がそうするのは許せない。朝鮮は清朝の門戸であり、日本のような敵対勢力が朝鮮を占領すれば、清朝の脅威となる。」

ヤ「この問題に対する閣下のみかたは存じ上げていますし、あらゆる敵意や猜疑を根絶できるような理解が、清朝と日本のあいだに成り立つという希望は、絶やしたことはありません。」

李「それなら、日本に清朝の邦土奪取をやめさせよ。それはさきに(b)台湾でこころみ、(a)朝鮮でやろうとし、(c)琉球ではやつてのけたことだ。…そこには原則がある。清朝は琉球を欲していない。君主の復位が望みなのだ。」

ヤ「そうした問題には別の側面があるとはお考えになりませんか。清朝はその不明確な政策で、自ら争論と攻撃を招いてきたのではありませんか。どうして清朝皇帝は、本当の国境を画定して、『ここそわが領土だ。防衛するのだ。』と世界に宣言しなかったのでしょうか。そうした宣言があつたら、世界は尊重したはずで、にもかかわらず清朝は、属国であるといながら、そのあとでその統治の責任を放棄しています。(b)台湾では、日本が生蕃による日本人水夫殺害の補償をもとめてきたとき、清朝は生蕃の行為には責任を負わない、と回答したではありませんか。日本が暴行の張本人を懲罰しようと軍隊を出すと、清朝はあわてて乗り出してきて、撤退してもらうために賠償金をしはらつたのです。そんなふるまいを西洋では『あさましい』というのです。もし台湾が清朝の領土なら、どうして外国軍隊の侵略という侮辱に甘んずるのですか。同じことは朝鮮でも起こりました。アメリカ船の乗組員が朝鮮人に殺害されたとき、前任者のロウ氏が総理衙門に救いをもとめたら、『清朝は朝鮮に責任をもたない』といわれたので、独自に朝鮮と交渉せざるを得なかつたのです。どうして清朝はその領土を画定しないのですか。」

李「清朝の版図は確定している。清朝があつて、その朝貢国がある。この朝貢国は自主(self-governing)である。しかし清朝皇帝に忠誠を誓っているのであつて、それは朝貢という行為であらわされる。この儀礼を果たしてしまえば、皇帝はその国事に干渉はしない。同時にその自立は清朝の重大問題だから、皇帝はそれに対するいかなる攻撃にも、無関心ではられない。」

ヤ「近代という時代に、そして今普及している文明には朝貢国なる制度はありえません。植民地なるものは、首都と同じく支配領域の一部なのです。アメリカには、多数の州、辺境の准州ばかりか、北の果て飛び地のアラスカもあります。しかし、いかなる外国であれ、もしアラスカに非友好的な目的で、兵士を1人でも置いたなら、それはニューヨークに1万人上陸させた戦争行為と同様なのでありまして、そう見られることでしょう。それが文明国のルールというものです。清朝もそれにしたいが、その版図を一元化し、世界にその領土の正確な境界を示して、難局を解決すべきではありませんか。」

李「どうして、清朝と周辺諸国のあいだに永年、存続してきた関係を外国が破壊せねばならぬ。理由がわからない。うまくやつてきたのに…」

※史料は岡本隆司著『属国と自主のあいだ～近代清韓関係と東アジアの命運～』名古屋大学出版会、p.313～p.315による。一部改変

[史料②]

[1876年 李鴻章より総理衙門へ]

…さらに恐ろしいのは、朝鮮が日本の圧迫をうけ、侵攻・占領されたりしたら、東三省という根本重地が防壁を失うから、唇滅びて齒寒しの憂となつて、将来の患禍はいつそ言うにたえないものがある…

[1883年 李鴻章の発言]

わが清朝建国のおり、まず平定したのが朝鮮であり、その臣服は安南・琉球の比ではない。ところが日本はしばしば朝鮮で煽動誘惑し、中國の属藩とならぬよう教唆しようとしている。…もし日本が朝鮮を中華の属國であると認めず、併呑したりしようとするなら、私は日本と争わざるを得ない。

※史料は岡本隆司著『属国と自主のあいだ～近代清韓関係と東アジアの命運～』名古屋大学出版会、p.31～p.32による。一部改変

[史料③] 1860年代 李鴻章の日本観

(日本は)宗室と大臣の聡明優秀な子弟を選抜して、西洋の武器製造工場に派遣し、各種の技術を学ばせ、さらに武器を製造する機械を購入して、自国で模倣製造を始めた。いまや汽船を動かし、榴弾砲を製り使いこなすことができるようになっている。…いったい、今の日本は、明代の倭寇にほかならない。西洋には遠く、我々とは近い。我々が自立できれば、日本も味方になって西洋の弱みをうかがうだろうが、(清が)自強できなくては、西洋とぐるになってその分け前にあずかろうとするだろう。

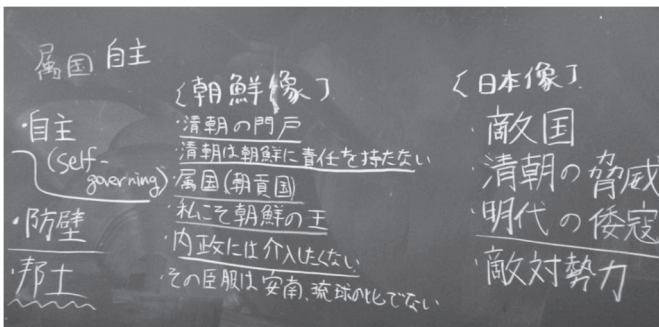
※史料は 佐々木揚著『清末中国における日本観と西洋観』東京大学出版会による。一部改変

## 2. 生徒の活動の状況

課題1に関しては、1年次の日本史Aで学習した知識および資料集などを利用して解答を導き出すことができる生徒が多い。(b)・(c)は、史料内容から意外とすんなりと出来事にたどり着く生徒が多いが、《史料①》にある「1883年」という年号や、「昨年の夏」という言葉に気付けるかが、(a)の出来事にたどり着けるかどうかの分かれ目であるように感じた。

課題2・課題3に関しては、《史料①》は李鴻章のセリフに注目することや、5個程度のキーワードないしは文章を書き出すことを口頭で添えて取り組ませることとし、机間巡視でワークシートへの書き込み状況を見て幾人かを指名し、黒板に書き出してもらった。これを踏まえて、「李鴻章の朝鮮像」「李鴻章の日本像」を生徒とともにまとめていくこととした。

《授業中の黒板の状態》



「李鴻章の朝鮮像」は、生徒のあげたキーワードから「防衛上最重要地域」「最後の重要な藩属国」「属国自主」という形に集約できる。ここで、生徒に対して電子辞書等で「自主」の意味を調べるように指示し、辞書上では「自主＝干渉されず独立して行くこと」という意味であるが、李鴻章自身はそうはとらえていないこと、「属国自主＝朝鮮は清の属国で内政・外交は自主である」ということを会話の中でもヤングに主張しているが、ヤング自身はそれを理解しきれないでいること（むしろヤングは辞書上の意味でしか自主を理解できない）を指摘し、この後の展開を紐解く上で、「属国自主」が鍵となることを確認した。

「李鴻章の日本像」に関しては、生徒のあげたキーワードから李鴻章が日本を非常に危険視していたことを生徒と確認する。彼自身の初の海外渡航は、日清戦争の下関講和会議であったことや、その日本イメージは「明代の倭寇」といったこれまでの歴史的イメージ及び李鴻章自身が直面した日本との間の諸問題からくるものであることを補足し、《史料①》で「それなら日本の邦土奪取をやめさせよ」と言っていることに注目させる。日本を危険視していた李鴻章としては、1871年の日清修好条規第1

条で日本を牽制したにも関わらず、1874年の台湾出兵・1879年の琉球処分がなされ、憤りを感じているのである。

課題4 二重線部を読んで、李鴻章とヤングがいう国際体制（国際秩序）の違いをまとめてみよう

課題4に関しては、朝貢－冊封体制と西欧諸国の国際体制との違いを「史料に基づいて」「自分の言葉で」まとめる必要がある。朝貢－冊封体制と西欧諸国の国際体制の違いに関しては、例えばアヘン戦争やアロー戦争の授業で外交や交易に関する認識の違いを史料などに基づいて学習しており、その上での課題となる。この課題に関しては、史料をそのまま写してしまう生徒も散見され、何に主眼を置いてまとめていいかが分からない生徒もみられた。そこで、机間巡視しながら「ヤングにはあって、李鴻章には曖昧な概念は何かを漢字2文字から3文字で考えてみよう」との助言をして課題に取り組ませることとした。

（史料上からうかびあがるその概念は、国境線や領域の境界である。）

《生徒の回答例》

李鴻章は国境決定が曖昧で、自国に従う国を朝貢国とし、その国に軍事介入はするが、国事には参加しない考え方。ヤングは国境を明確に定め自国に従う国を植民地とし、その国を首都と同様に支配していく考え方。

李鴻章は植民地に関しては自治を認め、忠誠を誓い儀礼を尽くせば、その国事に干渉しない体制を理想とする。ヤングは植民地には自治を認めず、首都と等しい支配領域と考えて全てをこちらで管理し、領域の境界を明確に示すべきだと考えている。

## 3. 授業の展開

### 3-1 朝鮮の開国と壬午軍乱

19世紀の朝鮮の状況として、日本史Aで既習の大院君政権や開化派、閔氏政権、日朝修好条規の状態を確認した上で、《史料①》で李鴻章が「昨年の夏」と触れていた1882年の壬午軍乱の状況ならびに壬午軍乱後の朝鮮政府の状況を簡潔に説明し、この壬午軍乱の後の朝鮮の状態を朝鮮側の人々がどのように捉えているかを《史料④》より読み取る課題に取り組むよう指示する。

【課題5】 史料④の中で、壬午軍乱後、閔泳翊や朴泳孝は清に対してどのような気持ちを抱いているだろうか。「属国・自主」というキーワードをつかひながら、具体的に書いてみよう。

## [史料④]

[1882年12月23日 朴泳孝の英公使パークスに対する発言]

…朝鮮の地位とは、こうです。自国民の統治に必要なので、軍隊を有していません。そのため清朝の制圧にあつて抵抗もできず、そのいうなりになるほかないのです。もうお気づきでしょうが、西洋諸国との条約草稿には、朝鮮は清朝の属邦だが、内政・外交は自主だ、と宣言する条款がありました。…国王の独立した地位をこのように宣言したことは、清朝の完全な承認をへております。にもかかわらず、清朝は今になって、朝鮮の内政・外交にあらゆる手をつくして干渉をすすめ、国王からはその主権を、政府からは行動の自由を奪いつつあります。

※史料は岡本隆司著『属国と自主のあいだ～近代清韓関係と東アジアの命運～』名古屋大学出版会, p.145 による。一部改変

## [史料⑤]

[金玉均と甲申政変…徐載弼の回顧談より]

彼（金玉均）は欧米の文明が一朝一夕のものではなく、列国間における競争の努力によって漸進的に何世紀も要して得られたものであるのに、日本は一代の間にそれを達成したものと考えた。そこで彼は自然と日本をモデルとして百方に奔走したのである。…彼（金玉均）はいつもわれわれに、日本が東洋のイギリスとなるならば、われわれはわが国（朝鮮）をアジアのフランスにしなければならないといった。

※史料は趙景達著「朝鮮における大国主義と小国主義の相克－初期開化派の思想－」『朝鮮史研究会論文集』第22章, 1985年, による。一部改変

[金玉均と甲申政変…金允植の回想]

金玉均は…世界の情勢に非常によく通じており、我々と共に国を憂え、志を同じくするものであった。…私は…天津に行き、金玉均らは…日本を遊覧することとなり、共に国を助けることを約束したものであった。しかし、私が壬午軍乱の際に、清軍を連れて清より帰った後、清は我が国に多く干渉するようになり、その結果、自分は清国党と呼ばれる身となった。金玉均らは、清が我が国の自主の権利を侵害するのを憤り、遂に日本公使と共に甲申政変を起こすこととなった。彼らはこの結果日本党と呼ばれるようになり、しかも、その計画が失敗した結果、国を挙げて逆賊といわれる身となった。私は政府にあるので、政府内の他と声をそろえて彼らを誅滅すべきである、と主張せざるを得なかった。しかし、金玉均らの心の内を考えれば、それが愛国の心より出た行為であり、他意がなかったことを知ることができるのである。

※史料は木村幹著「近代朝鮮の自国認識と小国論（二）」『愛媛法学会雑誌』21(3), 1995年, による。一部改変。

## [史料⑥]

[金玉均が1886年に李鴻章に送ろうとした書簡]

清国皇帝陛下が盟主となって欧米各大国を説得し、朝鮮を中立の国にして万全無危の地とする。そして李鴻章閣下の巧みな手腕で善隣友好を進めて、朝鮮と清がお互いに助け合う関係を固く結ぶという東アジアの政略をのばせば、それは朝鮮だけでなく、貴国（清）にとっても得策ではないでしょうか。

※史料は金玉均全集にある『与李鴻章書』による。一部意訳した。

[兪吉濬の『中立論』1885年]

中国を盟主とし、イギリス・フランス・日本・ロシアなど、アジアの土地に関係ある諸国と会同することを乞う。そうして進んで朝鮮はその間において共に盟款を訂する。そうすれば、これは我邦（朝鮮）の地のためだけでなく、また中国の利となり、諸国相保の計となる。

※史料は伊藤俊介著「兪吉濬～その開化思想と政治活動～」『東アジアの知識人①文明と伝統社会』, 有志舎, p.283 による。一部改変

[尹致昊日記/1894年6月～7月の記述]

朝鮮政府に聡明さと愛国心があれば、朝鮮を改革し、極東のスイスとなる良い機会かもしれない。…聡明で愛国心ある人物の掌中に朝鮮の政務を握らせたならば、改革が進んで中国のくびきから復活する可能性がある。完全な中立が朝鮮を安全な立場におくかもしれない。

※史料は『尹致昊日記』に基づき、平易な日本語に訳した。

## 《生徒の回答例》

清朝は「属国自主」を宣言していたにも関わらず、朝鮮の内政に干渉し、自由を奪おうとしていることに憤りを感じている。

今までは、朝鮮は清朝の属国だが、内政・外交は自主だというのが旧例で普通だと思っていたが、突然内政に介入してきたのでとても混乱し屈辱を覚えている。

生徒の多くが、朝鮮側が不満や怒り、屈辱感を抱いていることをすんなり指摘してくることを踏まえて、清と朝鮮の宗属関係も、清側の思う「属国自主＝属国としての朝鮮の立場を強調し、介入・干渉する」と、朝鮮側の思う「属国自主＝内政・外交は尊重される」に大きな隔たりがあることに意識を向けさせ、この相違が「自主を守りたい意識の強い」朝鮮での1884年の甲申政変の土壌になったことへの説明へとつなげている。

### 3-2 甲申政変

課題5の状況を踏まえて、清の介入・甲申政変を引き起こすことになる金玉均は何を考えていたのか、それを《史料⑤》から読み解いてもらうこととした。

〔課題6〕 史料⑤を読んで、甲申政変で金玉均らが目指した朝鮮の国家像はなんだと考えられるだろうか。下線部を参考にして書いてみよう。

この課題6で「金玉均の抱く朝鮮の国家像」を読み解いてもらうことにしたのは理由がある。この時期の朝鮮を授業するにあたって、従来「事大党・独立党・親日派・親清派・親露派」といった用語を使用した授業がなされていたように感じる。ただこうした用語だけでは、朝鮮の人々の行動の表層をなぞるだけにすぎず、彼ら自身が自らの国をどのように把握し、どのような目標をもって行動していたかという視点がなければ、この時代の理解にはつながらないと感じたからである。

#### 《生徒の回答例》

列強 日本が国力をつけアジアで列強の仲間入りをするならば、朝鮮は日本にならない独立自主の国力を持つべきだ。

金玉均が目指したものは、あくまで内政・外交の自主である。今まで属国自主として清に従属してきたが、清がその関係をおびやかしてきたため、日本に手を借り朝鮮の自主もつと云えば欧のような列強を目指した。

この課題でも課題4同様に史料をそのまま写す生徒もみられたため、机間巡視しながら「金玉均が目指した国家像を漢字2字のキーワードで表現する」ことを指示して取り組んでもらった。

ここで「列強」というキーワードに生徒がたどり着いたところで、甲申政変の概要の説明へとつなげていくこととする。甲申政変では、金玉均の甲申日録に記された綱領をあわせて、彼の目指した朝鮮の国家像と改革案をみていき、結果的に袁世凱率いる清軍の介入で挫折したこと、金玉均が亡命先の日本で冷遇された後に上海で殺害され、その遺体が朝鮮で処罰されたことなどを説明する。その上で、甲申政変が挫折した後の金玉均やその周囲の朝鮮国家像の変化を《史料⑥》より読み解いてもらうこととした。

〔課題7〕 史料⑥を読んで、甲申政変以降に金玉均らが目指した朝鮮の国家像はどのようなものであったか。史料中の具体例を参考に考えてみよう。

この課題でも、課題6と同様に「甲申政変後に彼らが目指した国家像を漢字3～5字のキーワードで表現す

る」ことを指示して取り組んでもらった。「中立国・永世中立国」といったキーワードに生徒がたどり着いたところで、この後の課題を意識して、甲申政変の前後で金玉均のなかに揺れ動く気持ちがあったことを確認して意識を向けさせるようにした。

### 3-3 日清戦争

〔課題8〕 史料⑧を読んで、日清戦争後、最終的に日本側が選択した朝鮮の立場はどれが基盤となっているか。選んでみよう。

甲申政変後、自主を守りたい朝鮮政府、殊に高宗や閔妃がロシアに接近する一方、これを牽制するために清が大院君を朝鮮に戻したことで、朝鮮政府内部の抗争が激しくなったこと、日本としては清の影響力の前に思うように朝鮮進出がはかれなかったことなど、風刺画を使用しつつ解説し、1894年に発生した甲午農民戦争及び日清戦争の勃発へと繋げることとする。甲午農民戦争では、全琫準の「倡義文」「全州和約」などの文字資料をもとにその反乱の目的などを説明することとした。また、既に中学の社会科や日本史Aで既習の日清戦争に関しては、当時中国で発行されていた「ノースチャイナ＝ヘラルド」の記事を元に、この日清戦争が対外的にどのようにみられていたかという視点から解説するとともに、課題8でこの日清戦争直前に日本側がどのような朝鮮像を模索していたのかを確認しつつ、最終的に下関条約で日本が選択した案を史料⑧<sup>12</sup>から生徒に選んでもらうこととした。（史料⑧は紙面の都合により割愛している。）その後、生徒と下関条約の条約文を確認しながら、この戦争が「中華帝国の崩壊」「朝貢－冊封体制の崩壊」「洋務運動の挫折」につながったことを確認し、まとめに進むこととする。

## 4. まとめ

今回の授業及びこれまでの授業でまとめにつながる史料として生徒に提示してきたものは以下の通りである。なお史料⑦<sup>13</sup>はまとめの一助となるために生徒に提示したものである。（紙面の都合により割愛している。）

李鴻章（清）	朝鮮	日本
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 洋務運動の最中、科挙の改革を求めたものの、受け入れられず憤慨する手紙（事前の授業で使用）</li> <li>● 史料① 1883年ヤングとの会話</li> <li>● 史料② 李鴻章より總理衙門へ1883年の李鴻章の発言</li> <li>● 史料③ 李鴻章の日本観</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 史料④ 1882年の英公使パークスと閔泳翊の会話・林泳孝の英公使パークスに対する発言</li> <li>● 史料⑤ 金玉均に関する徐載弼の回顧談・金允植の回想</li> <li>● 史料⑥ 甲申政変後、金玉均が李鴻章に送ろうとした手紙など</li> <li>● 史料⑦ 閔泳翊の1886年における発言</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 史料⑧ 日本の対朝鮮政策</li> </ul>

こうした文字資料の読み解きをふまえて、まとめとして生徒に最後に出した課題は以下のものである。

A 19世紀後半の東アジア世界の様相を踏まえて、〇〇の時と題名をつける

B 19世紀後半、複雑な国際情勢下で苦悩した東アジアの知識人たちが自らに問わざるを得なかったものは何かを考察する。

Aに関しては、「近代化」など教科書の項目となっている用語ではなく、自分で考えてつけること、Bにはその論拠を示すようにも指示して取り組んでもらった。回答事例としては、清・朝鮮・日本の状況をふまえて、東アジアの知識人が自らに問わざるを得なかったことを、的確に書き記しているもの(回答例①・③)や、概括的に東アジアの知識人が自らに問わざるを得なかったことを書いているもの(回答例②)がみられた。

こうした回答に対しては、以下のようなルーブリックを用いて評価することを試みているが、生徒の記述内容が多岐にわたることから、もう少し精査する必要があると感じている。

ルーブリック	3	2	1	0
思考・判断・表現	19世紀東アジアの知識人が自らに問わざるを得なかったことを、明確かつ概括的に書き記している。	複数の東アジアの知識人の考え・動向をふまえてかいているが、概括的にかけていない。	1名の東アジアの知識人の考え・動向についてのみ書いている。	課題の内容を理解できていない。
資料活用	複数の資料に基づいて、その内容を踏まえて書いている。	1つの資料に基づいて、その内容を踏まえて書いている。	提示された資料の内容をそのまま書いている。	提示された資料を活用できていない。
知識・理解	授業で得た多地域の状況を踏まえて書いている。	授業で得た一地域(清・朝鮮・日本)の状況を踏まえて書いている。	授業で得た知識をそのまま書いている。	授業で得た知識が生かされていない。

### 【今後の課題と展望】

諷刺画や絵画などの図像資料に比較し、文字資料を使用した活動を含む授業は生徒にとってやはりハードルが高く、それなりに授業時間をとられてしまうものである。そのことを考慮しても、「単元を貫く基軸となる問い」を意識しつつ、効果的な場面で授業を設定する必要があると思われる。また、生徒の活動・論述などをどのように評価するか、ということも強く問われてくる。そうした点から、コンピテンシー・ベース<sup>14</sup>のカリキュラムやルーブリックによる評価などを組み込んでいく必要があるが、その提示の仕方や内容の精査が今後の課題であると思われる。

### 《生徒の回答例》

- ・改革と欧米勢力・渦中の時代
- ・近代化焦りの時代
- ・保守と革新の摩擦の時代
- ・隷属の時代
- ・国家の運命を決めた時代
- ・周辺国だけでなく、世界の国々の間での自国の立ち位置を理解するようになった時代
- ・課題山積！！狼狽の時代
- ・勢力変遷の時代
- ・葛藤の時代
- ・崩壊の時代
- ・変化と崩壊の時代
- ・西洋化と伝統の対立の時代

#### ①

- ・東アジアの国々の伝統は、列強などによって変わっていった。東アジアの知識人たちは、果たして自分たちが信じてきた伝統は正しいのか、それとも列強の概念が正しいのかということを考えざるを得なかったと思う。
- ・日本のように列強に迫る勢いの国もあるが、現実には列強の手中に転がされてしまっている状態。既に出遅れてしまった国際競争においてまずはいかにして自国の独立を保てば良いのか考えなくてはならなかった。そのためには、西洋のやり方を取り入れるべきなのか、伝統的な手法を貫くべきなのかという選択に迫られた。

②列強の植民地支配の危機が迫る中、東アジア諸国はそこから逃れるべく、自国の発展・強化を目指したと考えられる。こうした複雑な国際情勢下で各国は西洋の文明を取り入れることで近代化を成し遂げ、自国・民族の「存続」—すなわち植民地支配を免れることを目指したであろう。各国の知識人らはこの流れの中で中心的役割を担っていたと考えられる。そんな彼らが彼ら自身に問うたこと、それはアイデンティティの存続、つまりは真の意味での自国・民族の存続であろう。欧化した自国は果たして自国と言えるのだろうか。彼らは自らに問い続けたであろう。「中体西用」はこの問いに対する彼らの一つの答えであろう。この時代は、近代国家を目指す西洋化の流れと、自国を自国たらしめる所以の存続という相容れない課題の間で「葛藤」した時代であったろう。

③当時の東アジアの知識人たちは、日本の台頭の始まりによる国際情勢の変化のなかで、それぞれの国のあり方を見直す必要があった。それまでは中途半端ものであった国境、主権などを明確に定める必要性がでてきたのである。その中で知識人たちは何故に列強からの侵略から、小国の主権を守り、立場を維持できるように列強との友好な関係を保つ術を自らに問い、さらにはそれまでの固定観念を取り払い、新しい諸外国の考えを取り入れつつ、自国の思想を保持することを考える必要性があったのではないだろうか。



世界史A学習指導案

19世紀後半の東アジア世界の様相

～朝鮮半島情勢を中心に～

- 1 対象：第2学年
- 2 ※2時間連続授業を想定
- 3 科目・単元・小単元：世界史Aヨーロッパの進出とアジア～東アジアの変動～東アジア国際秩序の変動
- 4 本時について

アヘン戦争・アロー戦争での敗北やロシアの極東進出、太平天国の乱等の国内反乱で動揺した清と、明治維新以降近代国家への道を歩んだ日本との狭間におかれた朝鮮の情勢を扱う。また、朝鮮情勢及びこの朝鮮をとりまく国際情勢の中で清が中華帝国としての地位を喪失していく様を、清の朝鮮政策とそれに対する朝鮮側の対応を中心に描くことで、この時代の東アジア世界の様相の理解につなげたい。

5 本時の目標

- ・李鴻章の日本観・朝鮮観とそれに基づく19世紀後半の清の対日本・対朝鮮政策の方針を理解させる。
- ・清の朝鮮政策を朝鮮の開化派の人々がどう受け止め、どのような朝鮮像を描きながら行動したのかを理解させる。
- ・複雑な国際情勢下にあった東アジアにおいて、李鴻章や金玉均ら東アジアの知識人が何に苦悩し、自らに問わざるを得なかったのかを理解させる。

6 評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断	資料活用の技能・表現	知識・理解
19世紀後半の東アジア国際秩序の変容に対する関心を高め、意欲的に追求しようとしている。	19世紀後半の東アジアの様相を、清・朝鮮・日本を主軸に、様々な国とのかわりや国際情勢の中で多面的・多角的に考察し、適切に表現している。	19世紀後半の東アジア情勢に関する外交文書及び清や朝鮮の知識人たちの発言及び回顧録から、事件の背景や時代の様相を読み取って表現している。	19世紀後半の東アジア国際秩序の変容過程に関する基本的な事柄を理解し、その知識を身に着けている。

7 本時の授業

	学習内容	指導上の留意点
① 導入	19世紀後半の清を中心とする冊封-朝貢体制の状況を確認する。  史料① 1883年の李鴻章・ヤングの会話を読む。	清を中心とする冊封-朝貢体制の状況をPPで再確認する。 ・この授業では史料を通じて東アジアの知識人の苦悩と彼らが何を問いつつ生きていたのかをみていくことを提示する。
② 展開	◇導入で読んだ史料①及び史料②李鴻章の対朝鮮観史料③李鴻章の日本観の史料を読んで、 〔作業〕※ 1 史料内にでてくる出来事に該当する事件を、資料集の年表などから探し出す。 2 李鴻章の朝鮮像・日本像を史料のなかからキーワードで抜き出す。	史料①・史料② 岡本隆司著『属国と自主のあいだ～近代清韓関係と東アジアの命運～』名古屋大学出版会による。一部改変 史料③ 佐々木揚著『清末中国における日本観と西洋観』東京大学出版会による。一部改変

<p>3 李鴻章とヤングのいう国際秩序の違いをまとめる。</p> <p>◇史料からみた李鴻章の日本像に基づいて、1870年代の日清関係をみていく。</p> <p>◇李鴻章の嘆きと、「中体西用」を基本理念としてなされていた洋務運動に対する李鴻章の見解から、この時代の李鴻章の姿勢を確認する。</p> <p>◇史料からみた李鴻章の朝鮮像と朝鮮の状況を史料①にそって確認し、壬午軍乱の状況を簡潔に説明する。</p> <p>◇壬午軍乱後の朝鮮政府の状況を説明し、史料④よりこの壬午軍乱後の清の対朝鮮政策を朴泳孝や閔泳翊らがどのように感じていたかを読み取らせる。</p> <p>◇1884年に甲申政変が起こったことに触れ、その時期の清の状況を確認する。</p> <p>◇史料⑤から、金玉均らがどのような朝鮮の国家像を描きつつ、甲申政変を起こした要因を読み取らせる。</p> <p>◇甲申政変に対する日清の対応を確認する。</p> <p>◇史料⑥から、甲申政変後、金玉均らがどのような朝鮮の国家像を描くようになったかを読み取らせる。</p> <p>◇甲申政変後の金玉均の動向及び甲申政変後の朝鮮政府の状況を説明する。 ・金玉均が暗殺された1894年に、甲午農民戦争起こり、これを機に日清戦争が起こったことを説明する。</p> <p>◇日清戦争の動向をノースチャイナヘラルド紙の紙面などを利用して確認する。</p> <p>◇下関条約の内容を確認する。東アジアの国際秩序である朝貢-冊封体制が崩壊して清が中華帝国としての地位を失ったこと、洋務運動が完全に挫折したことを確認する。</p> <p>◇史料⑧日清戦争の1894年8月の閣議でだされた朝鮮案のうち、日本が最終的に選択した朝鮮案の基盤となった案を生徒に選択させる。</p>	<p>朝貢一冊封体制と欧米の国際体制の違いを史料から読み取る。(特に領土の概念に注目させる。)]</p> <p>・日清修好条規の条文(第一条)から李鴻章の意図を確認する。</p> <p>・台湾出兵、沖縄県の設置といった日本の行動を、李鴻章がどう感じていたかを史料①で確認する。</p> <p>・洋務運動の理念は、既に授業(教育実習生による)であつかわれた内容なので、簡潔に確認する。 キーワード「属国自主」を強調する。 大院君政権・開化派・日朝修好条規の詳細は日本史Aなどで学習済みなので、PPを利用して簡潔にまとめる。</p> <p>・史料④～史料⑥の読み取りに関しては、机間巡視し、授業展開のkeyとなることを書いている生徒に発表させる。 ※展開状況により史料読み取りを一部割愛することがある。</p> <p>史料④ 岡本隆司著『属国と自主のあいだ～近代清韓関係と東アジアの命運～』名古屋大学出版会による。一部改変</p> <p>史料⑤ 徐載弼『回顧甲申政変』。趙景達著「朝鮮における大国主義と小国主義の相克-初期開化派の思想-」より。一部改変+『統陰晴史』金允植。木村 幹「近代朝鮮の自国認識と小国論(二)」より、一部改変</p> <p>史料⑥ 金玉均全集にある『与李鴻章書』による。一部意訳した。+兪吉濬著『中立論』。伊藤俊介著「兪吉濬～その開化思想と政治活動～」『東アジアの知識人①文明と伝統社会』による。一部改変+史料は『尹致昊日記』に基づき、平易な日本語に訳した。</p> <p>・日清戦争の詳細な戦況は日本史Aで学習済みなのでここでは触れない。 ※下関条約の内容に関しては、宿題として生徒各自で確認し、プリントに記入しておくよう指示してある。</p> <p>史料⑧ 陸奥宗光『蹇蹇録』による。なお、岡本隆司著「世界の中の日清朝関係史」講談社選書メチエのものをもとに一部意訳。</p>
<p>③ まとめ</p> <p>◇19世紀後半、金玉均ら朝鮮の知識人が描いた朝鮮像の変遷をまとめる。</p> <p>◇複雑な国際情勢下におかれた東アジアの知識人の苦悩から、彼らが何を自らに問わざるを得なかったのかを考察する。</p>	<p>◇日清戦争後～韓国併合に至る過程の中でもこの授業でたどりついた朝鮮像が目指されていく。</p>

## 8 参考文献

〔書籍〕※ 2000 年以降出版の主要なものを記載。

- 岡本隆司著『属国と自主のあいだ～近代清韓関係と東アジアの命運～』名古屋大学出版会, 2004.  
 岡本隆司著『世界のなかの日清韓関係史交隣と属国, 自主と独立』講談社〈講談社選書メチエ 420〉, 2008.  
 岡本隆司著『李鴻章—東アジアの近代—』岩波新書, 2011.  
 趙景達著『近代朝鮮と日本』岩波新書, 2012.  
 趙景達ら編『講座東アジアの知識人①文明と伝統社会 19 世紀中葉～日清戦争』有志舎, 2013.  
 月脚達彦著『朝鮮開化思想とナショナリズム～近代朝鮮の形成～』東京大学出版会, 2009.  
 長田彰文著『世界史の中の近代日韓関係』慶應大学出版会, 2013.  
 村田雄二郎編『新編原典中国近代思想—2 万国公法の時代洋務・変法運動』岩波書店, 2010.  
 木村幹著『然らば致し方なし高宗・閔妃』ミネルヴァ書房, 2007.  
 木村幹著『朝鮮／韓国ナショナリズムと小国意識』ミネルヴァ書房, 2000.

〔論文〕

- 姜東局著「暗黒の連合：閔泳翊の国際認識における伝統と近代」『名古屋大学法政論集』240, 2011.  
 木村幹著「近代朝鮮の自国認識と小国論(一)金允植に見る朝鮮ナショナリズム形成の一前提」『愛媛法学会雑誌』21(2), 1994.  
 木村幹著「近代朝鮮の自国認識と小国論(二)金允植に見る朝鮮ナショナリズム形成の一前提」『愛媛法学会雑誌』21(3), 1995.  
 月脚達彦著「開化思想の形成と展開—兪吉濬の对外観を中心に—」『朝鮮史研究会論文集』28, 1991.  
 趙景達著「朝鮮における大国主義と小国主義の相克—初期開化派の思想—」『朝鮮史研究会論文集』22, 1985.

〔史料〕

- 金允植『統陰晴史』  
 金玉均『金玉均全集』「与李鴻章書」  
 兪吉濬『中立論』  
 尹致昊『尹致昊日記』  
 陸奥宗光『蹇蹇録』

<sup>1</sup> [http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afiedfile/2016/09/12/1377052\\_02\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afiedfile/2016/09/12/1377052_02_1.pdf)

<sup>2</sup> [<sup>3</sup> 本校の教育過程に関しては以下の本校 web サイトを参照のこと。 <http://www.gakugei-hs.setagaya.tokyo.jp/01gaiyo/01katei.html>](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/053/siryu/_icsFiles/afiedfile/2015/08/06/1360750_2-3.pdf#search='歴史科目の検討のあり方について(素案)'>http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/053/siryu/_icsFiles/afiedfile/2015/08/06/1360750_2-3.pdf#search='歴史科目の検討のあり方について(素案)'</a></p>
</div>
<div data-bbox=)

<sup>4</sup> 中村彩乃「歴史的思考力を育成する授業の在り方—高等学校日本史 B を中心に—」『平成 23 年度 開発実践報告』, 2012 年後藤隆浩「生徒が主体的に歴史的思考力を培う世界史学習の在り方—「思考の方法」を定着させる手立てに着目して—」『岐阜大学教育学部 教師教育研究 10』2014

池尻良平・山内祐平「歴史的思考力の分類と効果的な育成方法」日本教育工学会 第 28 回全国大会

など様々な論文での言及を参考にした。

<sup>5</sup> [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shougai/033/shiryu/\\_icsFiles/afiedfile/2016/02/17/1367231\\_04\\_2.pdf#search='文科省+新テスト+世界史'](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shougai/033/shiryu/_icsFiles/afiedfile/2016/02/17/1367231_04_2.pdf#search='文科省+新テスト+世界史)

<sup>6</sup> [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shougai/033/shiryu/\\_icsFiles/afiedfile/2016/02/17/1367231\\_04\\_2.pdf#search='文科省+新テスト+世界史'](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shougai/033/shiryu/_icsFiles/afiedfile/2016/02/17/1367231_04_2.pdf#search='文科省+新テスト+世界史)

<sup>7</sup> 岩波講座『世界歴史22岩波講座 世界歴史(22) 産業と革新—資本主義の発展と変容』斎藤修著「産業革命—工業化の開始とその波及」p.9.

<sup>8</sup> ルーブリックの作成に関しては、美那川雄一著「逆向き設計」論による世界史授業デザインパフォーマンス課題・評価の試み—『世界史の研究』243, 山川出版社, 2015, などを参考にさせていただいた。

<sup>9</sup> 1 学期の授業実践に関しては、本校紀要 50 「諷刺画から覗いた世界—19 世紀を中心に—」を参照のこと。

<sup>10</sup> [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/youryou/1304427.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/1304427.htm)

<sup>11</sup> 史料は岡本隆司著『属国と自主のあいだ～近代清韓関係と東アジアの命運～』名古屋大学出版会, 2004. による。なお、文字資料並びに解説に関しては、山川出版社『詳説世界史図録』にも掲載されているので参考にされたい。

<sup>12</sup> 1894 年 8 月 17 日の日本政府の閣議で陸奥宗光外相が提出した 4 案, 授業では岡本隆司著, 『世界の中の日清韓関係史』講談社選書メチエ, 2008. のものを参考にして平易に改変したものを生徒に提示した。

<sup>13</sup> 姜東局著「暗黒の連合：閔泳翊の国際認識における伝統と近代」『名古屋大学法政論集』240, 2011. を参照のこと。

<sup>14</sup> [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/016/siryu/06092005/002/001.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/016/siryu/06092005/002/001.htm)